

稱讃 二八三号

二〇二六年七月一日発行



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺
〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

メール shousanji@festa.ocn.ne.jp

じんじつぼう むげこう
尽十方の無碍光は

むみよう
無明のやみをてらしつつ

いちねんかんぎ

一念歡喜するひとを

(信心よろこぶひと)

『浄土和讃』諸経讃

めつど

かならず滅度にいたらしむ

『高僧和讃』曇鸞讃より

「信心歡喜乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御
ちかひをききて疑ふことのなきなり。「歡喜」とい
ふは、「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」はこ
ろによろこばしむるなり、うべきことをえてんずと
かねてききよりよろこぶことなり。「乃至」は、お
ほきをもすくなきをも、ひきしきをもちかきをも、
さききものちをも、みなかねをさむることばなり。
「一念」といふは、信心をうるときはまりをあら
はすことばなり。(『一念多念証文』より)



今年はスーパーエルニーニョで気候変動を危惧さ
れると言われながら、梅雨らしい梅雨かなとのん
きに過ごしていましたが、やはり、日本中で、世界
中で、酷暑や洪水、地震の災害が頻発しています。
經典に『仏説盂蘭盆經』があります。この經典が
元となつて、お盆が勤まるようになりました。
お釈迦さま(在世のころ、七月十五日(旧暦 現
在では八月中旬頃)は、雨季が終わる頃で、多くの
僧が室内で研究や修行に明け暮れる安居の最終日

です。その日、僧侶たちは、思い思いに
外に出て、雨季の間、大洪水等の災難
にあつて亡くなった方、苦しんでいる方
のために、懺悔をします。
その懺悔する僧侶に対して、敬い感
謝の意を持って衣食住の品を捧げなさ
いとお釈迦さまは説きます。
この七月十五日を僧侶が懺悔する日
(僧自恣の日)とも言われ、仏さまが喜
ばれる日(仏歡喜の日)と言われます。
何故、「仏歡喜日」と言われるの
か、「經典」から私なりに読み取ると、
目連尊者が餓鬼道に堕ちたお母さん
を助けるにあたつて、お母さんを哀れ
に思い、何とか助けようとしても自分
の力ではどうすることも出来なかつ
た。お釈迦様のお話を聞いていくうち
に、お母さんが
餓鬼道に堕ちた
のはお母さん自
身の業だと思つ
ていたことが、
全て私のためで
あつたことに氣
づいていき、私
が仏道を歩むの
は、自分の榮譽
ではなく、苦し
む人びとを救う
ためであつたこ
とに氣づかそう
と、あえてお母
さんは、仏さま

2026 (令和8) 年度 稱讃寺門信徒会費 年会費 6,000円

①城北信用金庫一ツ家支店

名 義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会
代表 北村信也
口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行 店名四四八

名 義 キタムラ シンヤ
口座番号 普通 2374851

の国(お浄土)から餓鬼道に堕ちたのでありまじょう。お母さんたちが救われている様子(実はお浄土に還っていく姿)を仰いで、私自身もお母さんと同じくお浄土に生まれて行く存在だと気づかされる。そして、お釈迦様(ご在世の私たちは、お釈迦様から直接法を聞き、救われることができますが、お釈迦様がいらつしやらない時代の人びとはどうしたらよいのでしょうか。同じように、「仏・法・僧の三宝に帰依すれば、救われて往くのでしょうか」と尋ねるのです。

その目連尊者の問いに対して、お釈迦様が「良い問いを興された」とお慶びになられました。

このことが、「仏歡喜日」とも言われるようになったのだと思うところですよ。

「一念歡喜するひと」とは、私たち衆生の側のことを言い表しております。ご和讃には、「信心よろこぶひと」とも言い換えられております。

また、『親鸞聖人御消息 十三』には、

また如来とひとしといふは、煩惱成就の凡夫、
仏の心光に照らされまゐらせて信心歡喜す。信心歡喜するゆゑに正定聚の数に住す。信心といふは智なり。この智は、他力の光明に攝取せられまゐらせぬるゆゑにうるところの智なり。仏の光明も智なり。かるがゆゑに、おなじといふなり。おなじといふは、信心をひとしといふなり。歡喜地といふは、信心を歡喜するなり。わが信心を歡喜するゆゑにおなじといふなり。・

とあります。また、「信心」と言われるものは、表紙の一段目に掲載しております『一念多念証文』の文中「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふところ

のなきなり」とありますように、「阿弥陀さまのご本願を疑わない」という私の心持ちを申します。

それで、「信心歡喜」とは、私が本願を疑うことなく信じたら、身に歡び、心に喜ぶほどの無上のよろこび(歡喜)が起ると、私は捉えておりました。その信心は現生で得られるとも言われるのです。(現生十種の益に「七つには心多歡喜の益」とある)なので、そんな思いにはこの私は「なかなか」というよりも絶対成れないなあの思いが強いのです。

一方、「信心歡喜」とは、「(一)信心を歡喜する」と言われ「(二)わが信心を歡喜することであるから同じ」であると味わつておられます。

①の信心と②のわが信心の違いは何でしょうか。①の信心は、阿弥陀さまのお心(疑蓋まじわることのない清らかなお心)を指していると思います。

②のわが信心は、「阿弥陀さまのご本願を疑わないう」という私の信じるという心のはたらきを指していると思います。(「わが」とは阿弥陀様かな)

ここでの「信心」は如来のお心と私の心は同じだと言われているのです。

この二つの「信心を歡喜する」とはどういうことでしょうか。「信じて歡喜する」のとは意味が異なっているように受け取れるのですが。

どうも「信心」とは、「私の信心」と言っても、それは阿弥陀さまの「信心」を指しているのではないのでしょうか。

「一念歡喜するひと」は「も」お念仏をよろこぶひととは「ということでありまじょう。」「お念仏」はさらに私のはからいが強まる言い様です。

「お念仏をよろこぶ」と言うのと、「南無阿弥陀仏」という阿弥陀さまのはからい「を喜ぶと受け取ると同時に、私を含む衆生が称え聞えてくる」「南無阿弥陀仏」しか接する方途はありません。

『歎異抄』第九条で、「念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申しいで候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にもをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、

いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫よりいまだ流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと云々。

孟蘭盆会を「歡喜会」と申します。お念仏申す私どもを仏さま方がおよろこびになつておられるのでありまじょう。

稱讃寺では、七月十六日午後二時より孟蘭盆会・歡喜会を行います。尚、八月は十一日から十六日まで鹿児島のお盆のお手伝いで帰省いたします。

特集 金子大榮師のご領解

一

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

二二 無辺の同朋

本文『大経』にのたまはく、仏、弥勒につげたまはく、この世界より六十七億の不退の菩薩ありて、かのくに往生せん。一一の菩薩は、すでにむかし、無数の諸仏を供養せりき、ついで弥勒のごとしと。

またのたまはく、仏、弥勒につげたまはく、この仏土のなかに、七十二億の菩薩あり、かれは無量億那由他百千仏のみもとにして、もろもろの善根をうへて不退転をなせりき。まさにかのくに生ずべしと。抄出

口語訳『大経』にいう。仏、弥勒に告げたまうこの世界から、六十七億の不退の聖者があつて彼の国に往生するであらう。その一一の聖者は、已に曾て無数の仏たちを供養せるものであつて、弥勒を徳を同じうするものである。

また『如来会』にいう。仏、弥勒に告げたまう。

この仏土に七十二億の聖者があり、無量の仏の所に於て、もろもろの善根を植えて不退転の身となったものである。その聖者たちも、彼の国に生れるであらう。

王休日は『大経』に信心歡喜して浄土に願生するものは不退転に住すと説いてある、その不退転は弥勒の境地であると領解した。その説を聞いて思い合はされることは、『大経』に「この世界より六十七億の不退の菩薩ありて彼の国に往生せん。」その人びとは「弥勒のごとし」と説いてあることである。その六十七億の菩薩とは、信心の行者のことではないであらうか。行者は凡夫であつても、信心の徳において菩薩とよばれるのであらう。「弥勒と等し」ということも、その菩薩であらしめられることにおいてである。

しからば、それらの往生人は「すでにむかし無数の諸仏を供養せりき」ということは、いかに領解すべきことであらうか。それは宿世から法縁ありて、三宝を敬い習いて来たということであらねばならない。それが今日の信心歡喜となつたのである。この事実を反省すれば、今日の信心歡喜あらしめるまでの如来大悲の善巧方便は深重であつたということであらう。こうして今生において弥勒と等しき喜びをあたえられる者は、ひるがえつて遠く宿縁の有難さを感じしめられるのである。

二

この教説においてとくに心ひかれることは、六十七億の菩薩の往生ということである。その

六十七億は『如来会』では七十二億とあるから数が問題ではない。畢竟これ無数ということであらう。またその往生人は、この世界からだけではない。経には他方の世界からも幾十億の聖者ありて往生すと説かれている。したがつてその往生人は現在のみではなく、当来の世にいてもあり、過去においてもあつたのである。それは

已・今・当の往生はこの土の衆生のみならず十方仏土よりきたる 無量無数不可計なり
―『讚阿彌陀仏偈和讚』―
と讃えられたものである。

しかしこれは果たして事実であらうか。已に同じ『大経』には「往き易くして人なし」と説かれてゐる。世界の現状を見ても、念仏を疑謗するものは多く、浄土の教えは顧みられない。しかれば往生人は極めて稀であるということが、かえつて真相ではないであらうか。この真相を見ることにおいて、ひとえにわれ一人のためなりという感も深いように思われる。しからば、この感知は、かの経説に反くものであらうか。

「みなまさに往生すべし」ということと、「往き易くして人なし」ということは、同じ経の説である。そのかぎり矛盾するものではないのであらう。したがつて信心の行者には両者は矛盾なしに感ぜられるものでなくてはならない。かえつて両者は表裏をして交感を深めるのであらう。そこには敬虔感情の性格ともいふべきものがあるのである。

三

思うに身心は一如である。されど強いて分別すれば、心のはたらきは知であり、身の受くるものは感であるというを得るであろう。しかし心の知るところは無間に開けているが、身の感ずることは有限に閉じられているようである。それは身は各個に別であるからであろう。けれども心は直に無間にはたらきといつても知の性格は分別的であることにおいてそれ自体は有限である。だから知は無限であることができない。無限に到達しているという知は、その実は感に他ならぬのではないであろうか。

これに対して感情は個身に閉じられてはいるが、感情そのものの性格は無限なるものである。感情は湧き出る泉のごときものである。それは制止しようとして制止しきれないものである。これすなわちその性格が無限のものであるからである。したがって感情はつねに身に余るものである。やるせないものである。悲しみは涙にあまり、喜びは手の舞い足の踏むところなからしむる。だから信心の行者もその悲喜の交感にひたれるときには、いかにしても、それを他に伝えることができず、ただ自身一人のものと思わずにおれぬのであらう。「往き易くして人なし」の経説に感激するもこの心である。しかれば「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに、親鸞一人がためなり」ということも、この身にあまる喜びの表白であつたにちがいない。したがってそこには信ずる人の稀で

あることの悲しみもあつたのであらう。悲喜はつねに交感によりて深められるものであるからである。

こうして感情には、つねに他に伝え得ないもどかしさがあるのである。それにもかかわらず感情は必ず他に伝わるものである。これに對すれば智識は必ず他に伝え得るものではあるうが、しかし実際には賢者の知識は、愚者に伝わらない。したがって知識の伝わりには碍りがあつても、感情の伝わりには障えるものがないのである。われらは、その伝われる感情におどろきて、感情こそは、自我を越えて、普遍なるものなることをおもしろしめられるのである。

したがって他にある感情も、また直ぐに自に伝わるのである。自我ともに伝え得ないものと思いつつ、伝わっているのである。この感情は聞法において自他の呼応となりて、同一念仏の喜びをあたえる。しかしそこに無辺の同朋あるを思いしらしめられるのである。それが信ずる人は稀であることと、無数であることと矛盾ならしめているのである。

四

私たちの師友の間には、しばしば説くものと聞くものとの心がけが話題となる。しかしてつねに説くものはいかに誠実であつても、聞くものの真剣さにおよばないことを反省せしめられるのである。語るものには知のみ多くして感

は乏しくとも、聞くものには、その知よりも感が受容せられているのである。貧しき感の火も聞く人の胸に移りて、燃え上るのである。この事実を翻つて思えば、語ることの感激も聞く人の真剣さに依つていふことであらう。この反省を語りあふ師友は、あるいは「説くものは凡夫、聞くものは仏」といい、あるいは「説くものは水に画き、聞く者は石に彫む」というのである。

これはいうまでもなく、いたずらに説く立場を卑下するものではない。畢竟は説くというも聞くことの他ないことを思い知ることである。それに依りて説く立場におかれてあるものに深い感激をもつこともなるのである。仏法の弘まることは、説く者の功ではなく、法そのものの徳であることが身に浸みて感ぜられるからである。愚鈍の身に説くことすら、喜びの感情をもつて受容する人びとのあるかぎり、仏法の弘まつている事実を否認することができない。念仏の人びとには仏法の弘まらないことを悲しむものはないようである。

されど、その仏法の流通は、教団の隆盛という形であらわれるものではない。また同一念仏者の宗会によりて、有力なる何事かがなされているということでもないのである。そこに着眼して識者は仏教は衰退しているといい、「日本に仏教なし」とさえいおうとしているのである。そこには宗教とは必ず教団の形成するものであるという予定観念もあるのではないであろうか。また信心とは敬虔感情であるに止ま

らずして、人間生活の動力となるものでなくてはならないという要求もあるようである。されどそれは果たして、そうなくてはならないものであろうか。社会を問題とする人も、宗教心はあるべきである。されど宗教心あるものは、必ず社会問題に取り組みねばならぬのではない。それは仏教学者は仏教信者であるべきであるが、仏教信者は必ずしも仏教学者でなくともよいようなものではないであらうか。

それのみではない。仏法を信ずる人は多く、隆盛であるといっても、相互に名告りあうているのではない。念仏の信者は教団に氏名を登録する必要がないように、また名告りあう必要もないのである。その意味において本願の宗教は超社会的であるともいえるのであろう。そこに感じられてあるものは、「無辺の同朋」というものである。

五

「本願を信じ念仏もうす」ものは、真宗の同朋である。されど天下万人が同朋であるということなくては、「本願を信じ念仏もうす」ということも成立しない。如来の本願は十方衆生を大悲してのものである。したがってその悲願を信ずる者の心には、「一切の有情はみな世々生々の父母兄弟」であるという感情がなくてはならない。しかれば念仏もうす身にも、それが一切の往生人の行であることが感ぜられているのであろう。

ここには人間の心にある同朋と、如来の信心をいただいた同朋とがある。しかして、この両者は現実と理想というようなものではない。それはまことに表裏となつていっているものである。したがって、その表裏を見失わないことにおいてのみ同朋教団というものがあるのであろう。この意味において同朋教団には結束がない。そこには念仏の行人は増加しても、真宗教団は隆盛しないという事実もあらわれてくるのである。それは悲しむべきことであるか、喜ぶべきことであるかは解らない。「宗旨伽藍は人の作るところなり。…強ひてこれを防護して失はざらんとするは、いはゆる偏見にして、また貪欲なり」といえる上人もあつた。されど同一念仏の喜びをもつものは、衆会して語りあう場をもちたいということも自然の感情であらう。しかれば教団の問題は、その隆盛か衰退かにあるのではなく、ただその本義がまもられているかどうかにあるのである。

思うに現在の状況にありては、仏法の流通と宗派の興隆とを一つに見ることは、いかにしても無理なことであらう。念仏の信者は必ずしも教団に奉仕しようとは考えていない。僧籍は真宗でなくとも、ただ弥陀の本願を信じている人がある。外教の人ですらも、念仏の有難さを語っている人が多い。それらの人びとを不徹底であるといえることができるであらうか。本願念仏の教えは宗派を越えて弘まろうとしているのである。それは宗派人の阻止することのできぬものである。まことにそここそ本願力の

不思議があるのではないであらうか。浄土の往生人は、この土の衆生のみではない。「十方仏土よりきたる、無量無数不可計なり」の経説を思い、感懐かぎりなきものあるをおぼゆることである。

浄土真宗のビハーラケアを考える

仏教文化研究所主催シンポジウム

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長―スピリチュアルケア―」

シンポジスト

前埼玉医科大学教授	渡辺 孝子
飛騨千光寺住職	大下 大圓
龍谷大学教授	鍋島 直樹
武蔵野大学教授	種村健二朗

田中ケネス(仏教文化研究所所長)

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長―スピリチュアルケア―」という題名で、今からシンポジウムを行います。このレジュメにもありますように、人間の死亡率は百パーセント、実にそうですね。ただ、百パーセントなのにもかかわらず、日本の社会も、私が育ったアメリカの社会でも、死ということについてはなかなか語る場がない。家族の中でも語れない、そして病院でもあまり語る場がない、ある意味でタブーなのです。ですから一番重要で、確実に、精神的に重要な課題である死について、断絶あまり語るチャンスがない。今回は、この重要な課題についてのシンポジウムを、四人の先生を中心に

行いたいと思います。そのような背景から、まず初めに司会者でもあり企画者でもある種村先生をご紹介いたします。では先生よろしくお願いいたします。

●種村健二郎(武蔵野大学看護学教授)

種村 本日の題としました「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長」について、少し説明をさせていただきます。

私は、医者です。がんの治療医をし、その後、終末期医療、ホスピス、と言った方がいかもしれませんが、その担当医もしてきました。

一九八一年から、がんは死亡率の第1位で、年々増加しております。がんで亡くなるのが最も多いのですが、どこで亡くなるのかと言いますと、九五パーセントは病院で亡くなります。がん以外の病気も含めると、亡くなられる八〇パーセントは病院で亡くなられる。現在、ほとんどの患者さんは、病院で亡くなっております。(コロナ禍以降、国が推進する地域包括ケアシステムや看取り体制の整備もあり、がんで亡くなられる方の約65～70%が病院・自宅10～15%・施設10～15%・ホスピス数%／がん以外の病気も含めても、病院65%・自宅17%・施設15%で、病院で亡くなられる方は減少していますが、一番多いです。)

現在は病院で死ぬようになったのですが、病院と違うのは、死ぬということに対して、本来、対応はできないのです。なぜかと言うと、死ぬことを視野に入れて、病院というのは作られていないからです。病院は、疾患を治療し、治すことを目標に作ら

れてきたからです。

また、明治の時代に、宗教と医療が、切り離されたことにも関係があります。死ぬことを問題としてきた宗教と医療が切り離された状態であるのは、他の国と比較して特殊であることにもなります。

死ぬことに対しては病院では対応しきれないために、最近では仏教の方々も、ビハラー僧、あるいは心の相談員という、そういう形で、病院の中に入るようになってきました。しかし、まだ一般的ではなく、亡くなっていく人に対する基本的なケアの考え方も、まだ確立しておりません。

キリスト教文化圏においては、病院つきの牧師(チャプレン)などの人たちがいます。欧米には、明治維新というのはないですから、宗教者が病院内で活躍しています。

我が国でも、現実に医療の中に入りまして、実践をしている僧侶の方もいらっしゃいます。今日は、実際に活躍されている三人の先生の話を行い、会場の皆さんと一緒に、死ぬ苦しみをどのように解放していったらいいのかということについて、話し合いたいと思っております。

今日のスケジュールは、三人の先生方に、まずお話をいただきます。講演が終了しました時に、質問用紙を回収しますので、よろしく願います。後半では討論をします。質問がありましたら、早めにご書いてください。よろしく願います。

最初の講師は、渡辺孝子先生です。渡辺先生は看護師さんです。最初に私がお会いしたのは国立がんセンターというところでした。渡辺先生は、埼玉県立がんセンター、がんの専門治療病院として大きくて現在では有名な病院であります。その

がんセンターの看護師長、すなわち看護部門のトップになりました。その後国際医療福祉大学の教授、あるいは、その後は埼玉医科大学の教授としておられます。がんの終末期医療の専門職でありますが、今日お話をさせていただくのは、題を示しましたように「死を宣告されたがん患者の体験」ということで、話をさせていただきます。がんの治療、あるいは看護というものに、専門的に携わってきた先生が、がんという体験をし、かつ、半年から一年という余命、残された命は一年、半年なのだというのを、国立がんセンターで告げられるという体験を持っています。すなわち、亡くなっていく、死んでいくという、死んでいく苦しみを体験し、そしてその後色々な体験を通して、その苦しみから解放されてきた、その体験をお話していただきたいと思っています。先生よろしく願います。

●渡辺孝子

(前埼玉医科大学保健医療学部教授)
「死を宣告されたがん患者の体験」

渡辺 今、種村先生からご紹介いただきました渡辺孝子と申します。私の前歴を種村先生が話されたので、これから話す体験はちよつと恥ずかしいのです。がん医療に携わっていた者が病気になるならこんな弱々しく、何も患者のことをわかっていなかったじゃないかと、皆様から言われるのを承知して、私の体験そのままをお話させていただきますと思います。何かありましたらどうぞなんなりと質問用紙にお書きいただければと思います。それでは、「死を宣告されたがん患者の体験」ということで、お話をさせていただきますと思います。

私はもともと、大変健康で、よく食べ、よく寝る、そしてよく活動する人でした。でも職業柄、病気には大変注意深く、四十歳を過ぎる頃から、人間ドックには必ず年一回入り、特にがんには非常に警戒心を持っておりました。それにもかかわらず四年半前、治療率の悪い難治がんにかかり、国立がんセンターで手術を受けました。手術を行った先生によると、腫瘍はかなり大きかったが成功したということでした。

その後、国立がんセンターで先端医療の恩恵を受けて、順調な経過をたどり、手術後二週間で退院しました。そして、三ヶ月後に職場復帰をし、さらに一年後には、仕事を含めて以前と変わらない生活が出来るようになりました。

再発の不安を抱えながらも二年間は何事もなく過ぎて、病気体験も今後の人生には非常に重要な糧となるのではないかと思いつながら希望が膨らみかけたところに、右の上腕骨、胸椎の一箇所に転移が見つかりました。二カ月間に及ぶ、転移に対する手術と放射線治療を受けて、それも無事に終了いたしました。その直後に、CT検査を受けたのですが、今度は縦隔リンパ節に転移が見つかりました。短期間に次々とがんの転移が起こるという、最悪の状況が起こったわけなのですけれども、日進月歩に進歩している医療、日本の最先端の医療施設で治療を受けているということ、わずかではあるが、困難な状況を乗り越えて長期生存している患者さんがいるという事実などから私はこの事態に希望を失うことなく、冷静に向き合う余裕を持っておりました。

間もなく、腫瘍内科に転科となり、抗ガン剤治療を受けることになったのです。私の苦しみはここから始まりました。私の主治医となった医師から、治

療前に家族同席のもとに治療の説明を受けることになりました。その時説明された内容は、「あなたのがんはもう治らない

これからの治療は、延命のために行う治療です」。さらに、「あなたの病気に効く抗ガン剤は今ひとつしかないけど、現在、海外で効果が確認されているというその抗ガン剤と他の抗ガン剤を併用した治療法の、臨床試験が行われている。これに参加することが、最もよい治療法である」とのことでした。

家族の一人がその治療効果はどの程度なのかと尋ねたところ、医師は表情を変えることなく「治療開始から余命は六ヶ月から一年」と答えたのです。その後医師は、「何か質問はありませんか？臨床試験に参加するかしらないかは明後日までに決めてください」と言って席を立ちました。私もおそらく家族も、これまで想像しなかったような強い衝撃を受け、病室に戻った後も、しばらく互いに無言の間を過ごしました。余命六ヶ月であることに加え、私が人間としてではなく、記号として扱われたように思えた医師の態度が、一層絶望的な気持ちにさせたのだと思います。日常生活に何の支障もなく過ごせている私と、医師の言う最高の治療を受けても六ヶ月しか生きられない私との接点が見出せず、治療に参加すべきか否か、何度も心の中に反芻して、悩みぬいた末に臨床試験に参加することにしました。それと同時に、医師の宣告を覆す何か良い方法はないのか、医師の予測が本当なら、死ぬための準備を急がなければならないという相反する二つの課題に必死に取り組む日々が始まったのです。

がん患者の闘病記をむききぼるように読み、先駆的ながん治療から、代替療法まで、様々な医療情報を集めて学習しました。私の知らないことがこ

んなにたくさんあるのかと驚くばかりでした。治療は、副作用のために、度々中断され、体調の悪さも日に日に悪くなった頃から代替療法を併用することになった。身体だけではなく、精神的にも元気がなくなっていく私を見かねた家族が知人に相談したところ、「専門病院の化学療法は研究目的で患者本位ではないという噂を耳にしたよ。そういう事情なら、患者本位の治療を行ってくれる医師を探した方がよいのではないの？」と言われました。その後、知人から二人の医師を紹介され、それぞれセカンドオピニオン外来を受診することになりました。その中から、生活するための治療言い換えれば日々の生活が出来るだけ楽しく過ごせるような治療を行うという考えを持つ主治医にお願いし、これまでの治療方法を変えることにしました。

新しい主治医は、私の場合は仕事を続けることもよく生きるために大切なことであるという理由で、仕事の継続を勧めましたが、職場の上司からの理解が得られず、職場を追われることになりました。人生の大半を掛けていた私のさきやかな自尊心が奈落の底に落とされたような思いでした。余命六ヶ月の宣告もとても辛かったですが、自分はその価値のない人間であるとの上司からの烙印はそれ以上のものでした。苦しみの真つ只中にある時、私の病気を心配してくれた友人の一人に数年ぶりに会うことになりました。友人は私の話を聞き、私が医学にあまりにも依存していることが苦しみを一層強くしていると感じたようで、末期がんから生還した一人の患者さんを紹介してくれたのです。その方を訪ねるために、一人旅を心配する家族に送られ、二泊三日の予定で九州に飛んだ私は、別人のように元気になって帰ってきたのです。

九州でお会いした患者さんとその方が所属するサポートグループのメンバーが、実に温かく、見ず知らずの私を迎えてくださり、がん患者が生き抜くために必要な基本的な考えを教えてくださいました。そのひとつは、がんは自分で自分の身体に作ったものである。つまり原因は自分の生き方であり、それを変えなければ、再び同じことが繰り返されるということ。その反対に、自分の病気を作った生き方を変えていけば、今からでもがんを治すことが出来るということでした。二つめは、「がんは医師だけに頼らず自分の力で治すものよ」という指摘を受けました。これまでの自分の考えを大転換させられたのです。同時に私のこれまでの生き方、考え方は、他者からの評価に翻弄され、本来の自分らしきとは別の方向で、長い間進んでいたことに気が付きました。随分長い間、自分を大切にすることを忘れて、間違った生き方をしてきたことを反省するとともに、がんを治すことが出来なくとも、がんと共存して生きることが出来るかもしれないという希望が湧いてきたのです。

九州での三日間は実に心地の良い日々でした、その心地の良さを私に与えてくれたのは、ぬくもりのある人との交流、素朴な自然食、街中の豊かな樹木と訪れた森の静けさでした。その後、信州の高原に一週間ほど滞在することになりました。滞在中、太陽の恵みを受けた野菜や果物を存分にいただき、山々に囲まれた美しい自然に身を委ねるときに、これまでになく心身の心地よさとともに生命が躍動するような感覚に包まれたのです。その翌日、私は病気を忘れ、これまで考えもしなかった小さな山登りを実行し、楽しむことが出来ました。あの体験以来、私は人それぞれの生命は人が操作出来ない、何か大いなる力によるものであると考えるよ

うになりました。

余命宣告を受けてから体験した死の苦しみは、心理学者である村田久行先生が言われている、人間のもつ時間存在、関係存在、自立存在が失われることによって起こるスピリチュアルな痛みと言っているようにも思いません。時間存在では私は余命六ヶ月という宣告によって、未来を奪われることになりました。その後、私の病気はかなり深刻なものだと知った友人の中には、早々に私との交流を絶つた人もおりました。職場だけでなく、長年所属していたある団体の役員を退くように勧告を受けるなど、時間存在だけでなく、自立存在、関係存在も失うことになったのです。私はこのような屈辱から逃れたいと思って、自らとつたことは、仕事を通していつの間にか増えていた書籍を思い切って捨てることでした。長い間かかって築き上げた自分のききやかな誇りを思い出させるものはこれからの生活には約には立たず、むしろ弊害になると思ったからです。また、友人との交流を狭めて、自分の今を語る機会を出来るだけ作らないようにしました。自分はこの以上、傷つきたくなかったからです。しかし、いずれの方法も私の苦しみを和らげる効果はなかったように思われます。

九州から帰った私は、このような屈辱的な感情よりも、私と以前と同様に接してくれる友人や同僚私の病気が少しでも良い方向に向かっていくように努力をしてくれる医師や看護師の方々、そして私の苦しみをそばで見守り励ましてくれる家族などに目が向けられ、自分は十分に幸せではないかと思えるようになったのです。私が死ぬ苦しみから解放されたのは、彼らから発せられる希望であったように思うのです。言葉で語られたことも多く、言葉で語られないものもありました。ある友人は、

「渡辺さんはとても元気そうだし、まだ十分に働けるじゃない」と言って、仕事を依頼してきました。またある友人は、食事会などの機会を作ってくれ、昔話に興じる楽しい時間を過ごさせてくれました。またある友人は、私の食事療法に必要な家庭菜園で収穫した有機野菜を、またある友人は実家で収穫した新鮮な果物を季節ごとに送ってくれます。また家族は、季節の変わることに旅行を計画し、私と過ごす機会を多く持つてくれ、出版社に勤める息子夫婦はがん医療の最新情報を届けてくれます。新しい主治医は、私の体調に合った治療をきめ細かく計画し、仕事も遊びも十分に楽しむようにと通院のたびに励ましてくれます。

多くの人から希望を与えられていると感じられるようになって、私は老いや障がい、また病気で苦しんでいる身近な人びとにも目を向けられ、自分だけではなく、私が体験した苦しみと対峙している人が少なくないということに気づかされました。と同時にその体験は形こそ違うものの、人はすべて人生のいずれかの時期に、向き合わなければならぬものなのではないかと考えるようになりました。どのような境遇においても、希望は、人が人らしく生きる上で欠くことの出来ないものであり、希望があれば人はどのような環境であっても、自分らしく、自律して生きることが目指す存在であると思うのです。希望を与えてくれた多くの人に恵まれた私は、二年前とは違った自分で今こうして皆様の前で体験を語ることとても幸せだと思っております。また、日を追うごとに私の生きるエネルギーの源は、有形無形の多様な場や、環境の影響を受けて生み出されていると感じるようになりました。ご清聴ありがとうございました。

(次号は大下大圓氏のお話です)